
最後のプレゼント

らんらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後のプレゼント

【Zマーク】

Z9296E

【作者名】

らんりん

【あらすじ】

トマトの嫌いな少女マトリン。大好きな従兄弟のクリスマス兄さんがクリスマスには帰ってきます。今年こそ、一緒に踊つてもらうんだもの。可愛らしい恋と家族と、少しだけ不思議なクリスマスのものがたり…

『最後のプレゼント』

やつぱり、素敵。

マトリンはちらりと相手を見つめます。

窓からの曇下がりの光の中、金色の髪がきらきらして。
その横顔。優しい口もと、長いまつげ。
胸がとくとくして。

息苦しくて。

手に持つ本で、顔を隠します。

マトリンはトマトの嫌いな女の子。今年、十歳になります。
トマトは嫌いだけれど12月は大好きです。大好きなクリス兄さんがクリスマス休暇で帰って来るからです。

隣に住んでいた従兄弟のクリス兄さんは大学生になって遠い街に行つてしましました。小さい頃から遊んでくれた優しいお兄さんが遠くに行つてしまつた日には、マトリンはこいつそりたくさん泣きました。

久しぶりに会つたマトリンの大好きなクリス兄さんは、随分大人っぽくなっていました。自分で買ったという赤い小さな車から降りたとき、マトリンに手を振ってくれました。着ていた白いコートが風にふわりと揺れました。

マトリンが密かにその大きな背中や、逞しい手に胸をときめかせたことをクリス兄さんは知りません。かけよつて抱きしめたかったの

に、恥ずかしくて出来なかつたこと。

「マトリーン、マニコア」

ママの呼ぶ声。

「ママが呼んでいるよ? いいのかい?」

「どうせお手伝いしなきつて言ひの。だからこいつ

マトリーンはクリス兄さんのお部屋の大きなベッドに横になつて、たくさんあるクリス兄さんの本からお気に入りの物語を引っ張り出して読んでいました。

階下ではマトリーンのママと、そのお姉さんのクリスのママが、クリスマスの準備のためにジンジャークッキーを焼いています。香ばしいバターの焼ける匂いにマトリーンは長い金色の髪をシーツに泳がせて何度も寝返りを打っています。

そろそろ、三時のお茶の時間。

マトリーンはイスに座つて本を読んでいるクリスに、ふと思いついたよじに言いました。

いえ、本当はずつと言いたかったのだけれど、じきじきしてしまつので、なるべくそれを顔に出さなうことタイミングを計つていました。

「ゴロゴロしたのもクッキーの香りのせいじゃなくて、早く言わなくちゃとあせっていたのです。だって、クリスマスの夜はどんどん近づいてきます。

けれど、静かな横顔のクリスは気付かない様子で、真剣に何かを読みました。

「あのね。クリス兄さん」

クリスが本から顔を上げました。

その縁の瞳に見つめられてドキドキするのは何もマトリンだけではありません。だって、ママでさえステキな青年になつたわねと頬を染めていたくらいなのです。

「クリスマスの夜、一緒に踊つてね」

言いました、ついにマトリンは言いました。いえ、目標はもう少し高かったのだけど、今はまだそれが精一杯。

例年、クリスマスはマトリンの家に伯母さんや伯父さん、少し離れた町に住むお祖母ちゃんとたくさんの従兄弟が集ります。リビングのソファーやクッショーンは取り払われて中央にクリスマスツリー。すでに準備は整っています。毎年必ず誰かがダンスを始めて、マトリーンも小さな頃から伯父さんのリードでぐるぐる回つて喝采を受けてたものです。親戚の中で一番年下のマトリンは家族のお姫さま。ここ数年は少し恥ずかしくて踊つていなかつたけれど、今年はクリスがいるのです。

新しく作つてもうつたフワフワしたワンピースを着ると心に決めています。

そして。

一緒に踊つて、マトリンの手を引いてくれるのはもちろんクリス兄さん。他には考えられません。

けれど。次にクリスが言つた言葉にマトリンはひどく落胆しました。「「めんね。マトリーン。僕はクリスマスの三日前からバイトで忙しくてね。二十六日に帰つてくるんだ。だから、今年はパーティーにも出られないんだよ」

優しく笑つて立ち上がると、ベッドに起き上がつていたマトリンの頭をなでてくれました。

マトリーンがよほど悲しい顔をしていたのでしょ、大きな手で抱きしめてくれました。

「よしよし

「やだ！私子供じゃないわ！」

マトリンは熱くなつた頬を押さえて、クリスを見上げました。

「アルバイトなんて必要ないのに」

八つ当たりのマトリンに、やつぱり子供だとくすりと笑つて、青年はクローゼットから何かを引っ張り出しました。

それは、真っ白いフワフワした毛皮のついた、真っ赤な。そう。

この季節にあちこちで見る。サンタクロースの衣装でした。

「ほら、これを着てお仕事なんだよ。マトリンは兄妹や従兄弟の中で一番末っ子だから、サンタクロースのこと好きだろ？だから打ち明けたんだよ」

「ケー キ屋さんの呼び込みなの？それとも、デパートのビラ配り？」
マトリンは口を尖らせたまま両腕を組んで胸をそらせます。マトリンが喜んでくれると思ったのでしょうか、クリスは少し残念そうな顔をしました。

マトリンはそれどころではありません。

せつかく勇気を振り絞つて、ダンスの申し込みをしたのに。

「私、クリス兄さんがそんな格好になるのは嫌だわ」

「大切な仕事なんだよ。子供たちにプレゼントを配るんだ」

「分かった！教会のボランティアね！？優しいクリス兄さんらしいけれど、家族を犠牲にしてまですることじやないとと思うのー。せつかく、久しぶりに帰ってきたのに！会えなくてとっても寂しかったのに」

「寂しかった？」

そこでマトリンは慌てて口を押さえました。

くくく、とクリスは響く声で笑います。

「マトリン、僕はお仕事でサンタクロースになるんだよ」

そんなの分かつてゐわよと頬を膨らめるマトリンに、クリスは笑いながら続けます。

「ほら、サンタクロースは世界に一人きりって言うわけじゃないだろ？僕はこのあたりを任せられたんだ。三年間ずっと、サンタクロー

スになりたいって申請してやつとなれたんだよ

「そんなにステキなお仕事なの？クリスマスパーティーを諦めて？」

皆、来るのよ？クリスにだつてたくさんのプレゼントが届くのに

「大切なお仕事だからね。ほら、似合つだろ？」

そういうつてクリスは髪を顔に当てて見せました。優しい瞳とすんな
りした顎にそれはなぜか似合つていました。

ひげの下の笑顔にマトリンはまだドキドキして、じつと見詰めてい
られなくなつてしましました。

「じゃあ、サンタさん、マトリンにもプレゼントくれるの？」

「そうだよ、マトリンの寝ている隙にそつと入つてきて」

マトリンはドキドキがひどくなつて胸を両手で押さえました。

大好きなクリス兄さんがたとえサンタのお仕事のためだといつても、

そんな風に会いに来てくれるのはとても嬉しい。

「わかつたわ！私、イヴの日は、絶対に寝ないで待つてる」
あははは。

クリスは笑いました。

「それじゃ、サンタクロースが困るじゃないか」

クリスがいたずらに白い髪をマトリンのほっぺたに当てました。
それはくすぐつたくて、少し甘い蜜の香りがしました。

クリスマスの一十四日。本当にクリスはお出かけしたままで。

そのためにマトリンは誰に誘われても踊ろうとしませんでした。せ
つかくステキなワンピースなのに。今日はお気に入りのブルーのリ
ボンで決めたのに。

壁際においた自分のイスに腰掛けて、みんなの様子を眺めていまし
た。

でも夜中には。

きっと、クリス兄さんが来てくれる。

「うう、せっかくおめかししたんだから、このまま待つてはいかない。

「マトリン、可愛いドレスだね、一緒に踊りつよ

「マトリンの隣の上の従兄弟のトーマスがマトリンの手を取つて引つ張ります。

「いいの、私、今日は踊らないの。階段で足をひねって少し痛いから

「

「なんだ、どうか。じゃあ、チキンを取つてきてあげるね」
優しいトーマスを見送つて、マトリンは次に近寄ってきた伯父さんに笑いかけます。

「おや、マトリン。今日はやけに大人しいじゃないか。そうしているとお母さんにそっくりだね」

「やめてよ、伯父さん、ママに似たくないのはははは。おじさんは赤くなつた顔いつぱいに笑顔になつて笑いました。

「ほり、そういう言い方も、そっくりなんだ」

マトリンは大いに気分が悪くなつて、ぷくっと頬を膨らめました。
おじさんはそれを見て余計に楽しそうで、手に持つていたシャンパンのグラスが空になると五杯目を飲もうとテーブルに戻つていきました。

ママは大嫌い。

マトリンはイスの上で膝を抱えました。

だって、パパを連れて来てくれない。

ママのママとパパは離婚して、今は離れ離れで暮らしています。
パパに会いたいのに、ママの許可がないと会こに来られないのです。

私は会いたいのに。パパも私に会いたがつているのに。
それをママが決めるのはおかしいわ。

マトリーンにはそれが納得できないのでした。

その夜。

階下ではまだ大人たちが楽しそうに笑っているけれど、マトリーンは一番小さっここともあって、一階の自分のお部屋へと上がっていました。

いつものクリスマスなら、一人先に寝るのさつまらないといつて駄々をこねるマトリーンですが、今日は違います。

「あらあら、珍しくいい子なのね。いい子にはせりと、サンタさんが素敵なものプレゼントしてくれるわよ」

ママのこの言葉はマトリーンを満足させました。そう、クリスのサンタクロースが来てくれるのです。プレゼントよりそれが嬉しいのです。

そうよ、そのためにはクリスに会つために早くベッドに入るんだから。

そうじて、マトリーンはこっそりクリスが来てもいいように、ふわふわのワンピースのまま、ベッドにもぐりこんで部屋の明かりを消しました。空はお月様が出ていて、窓からさす灯りは、青く白く、床を照らし出しています。

マトリーンはじつと目をつぶっていました。

トーマスが母親鳥のようにたくさん食べ物を運んでくれたので、マトリーンはお腹がいっぱいです。気をつけないと本当に眠ってしまいます。

そうです。

ふつと頭が真っ白になりかかるたびに、だめだめ、と小さく頭を振りました。

何度もか、そんな風にしたときです。
カタンと音がしました。

クリスかな。

マトリンはそつと布団の中の手を握り締めました。
ドキドキして、この音がクリスに聞こえちゃうんじゃないかと本気で心配していました。

がたん、がさがさ。
誰かが、窓から入ってきました。

暖炉がないから、窓なんだな。危ないお仕事だな。

そんな風に思つたとき、ふわりと夜の風と一緒に甘い香り、そう、あの白い髪の香りがしたのです。

クリスだわ！

そこで、マトリンは目を開けました。

「わー！」

驚きました。

すぐ目の前に覗き込むサンタクロース。
月明かりの中でも、ぼんやり白く光つていて、優しい縁の瞳が笑っています。

「クリス兄さん！」

ぎゅっと抱きついてしました。

だつて、だつて。

ずっと待っていたんだから！

「マトリーン、いい子にしていたかい？」

マトリーンは大きく頷きました。

「じゃあ、プレゼント、何がいいかな」

「プレゼントはいいの、クリス兄さんとダンスがしたいの」
サンタクロースはおやおや、と笑って、マトリーンの手を引くと床に立たせました。

不思議と手をつないでいるとマトリーンも同じように光っているみたいで。窓が開いているのに全然寒くない。
床もひんやりしないのです。

「ね、踊りましょ」

けれどクリス兄さんは困ったように首を傾げました。

「今夜は忙しいんだよ。困ったな」

「じゃあ、一緒に行くわ

「お仕事だから、小さなマトリーンには難しいよ」

「大丈夫！だつて、プレゼントを配るだけでしょう？それに、私もときどき窓から出て、屋根を這つて隣のお部屋へ入ったりするの得意なのよ」

「大変だよ？」

「平気だもの！」

クリス兄さんは笑つて、じゃあ、お手伝いしてもらおうかなと言つてマトリーンに着ていた赤いマントを付けてくれました。

それは温かくて、優しい甘い香りがして。

それから、ちょうどマトリーンが着ていた真っ白なワンピースにどうとも似合つて可愛らしかったのです。嬉しくなつてマトリーンはクリス兄さんの後について、窓の外に足を踏み出しました。

「おつと、忘れちゃいけないね、ほら、これをおいて」

裸足だったので、クリス兄さんが抱いでのいた白い袋から、赤茶色の上質なブーツを出してくれました。

誰かへのプレゼントなの、と尋ねるとクリス兄さんは小さくワインクしました。

屋根の上にはつらら白い雪が積もっています。いつの間にか降っていたのです。マトリンは気付かなかつたので、真っ白に見える街並みを嬉しそうに眺めます。

「ち、マトリン、急がないとね。まずはほら、隣の窓からトーマスに届けるんだよ」

「そうね、あのね、今日トーマスはとっても優しかったの。親切にしててくれたのよ」

「やうだね、じゃあ、マトリンが届けてみるかい？」

マトリンは少し緊張しながら頑くと、クリス兄さんが開いてくれた窓から、とこと降り立ちました。

部屋の中は薄暗くて。マトリンは床に自分の影が映るのを不思議な気分で見ていました。

ぐつすり睡っているトーマスの枕元に、マトリンはクリスが渡してくれたプレゼントの箱をそっとおきました。それはトーマスが前からほしがっていた飛行機みたいでした。

「メリークリスマス、今日はありがと」

そう小さく挨拶して、マトリンは頬に軽く口付けをしました。

「むにゃ

トーマスは眠つたまま嬉しそうに微笑みました。

そのまま寝返りを打つて、お布団を抱きかかえるようにして首を向けてしまいました。

窓から外に出ると、クリス兄さんが待っていました。

「さて、お隣に移らなきやいけないんだ。おいで」

そう言ってマトリンの手をとります。

足元はもう屋根の一一番端。雪も積もっているし、なれないブーツでマトリンは怖くなりました。月明かりで雪は青く光っています。いつの間にかクリス兄さんの手をぎゅっと握り締めています。小さく見える庭には、飾つてあるスノーマンのお人形が見えます。人形に雪が積もって本物のスノーマンだわ、それをクリス兄さんに報告しようとした時です。

お兄さんは小さな口笛を吹きました。
音もなくふわりと。

影がマトリンを覆います。何かが月明かりをさえぎったのです。足元ばかり見ていたマトリンは怖いのも忘れて空を見上げます。

それは、大きなトナカイでした。

マトリンは本物の馬を見たことがありましたがそれに似ていると思いました。もっと細くて小さなものを想像していたのに、それはとっても大きいのです。見上げないと視線が合いません。馬よりは細い口が二カツと開いたかと思うと白い息が風に広がります。

「今、ねえ、今笑った！」

「気のいい奴だからね」

クリス兄さんの言葉に応えるようにトナカイはツヤツヤした枝のような角を傾けて、クリス兄さんの肩に擦り付けています。

「よしよし、甘えているんだよ
「すごい！」

「驚いた？」

「うん、素敵、素敵！」

マトリンもそつとトナカイの頬に手を伸ばします。マトリンが触るまでじつと待つしてくれたようです。さうじと温かい。マトリンが嬉しくなつて笑うと、トナカイもまたにかくと口を広げます。

そこでマトリンは気付きました。

トナカイは宙に浮いていました。小さな金色のそりを後ろにつけて、そこにはまだたくさんの中の袋が乗っています。

これは夢かもしれない。

マトリンは思い出しました。

サンタクロースなんていないのに、こんな夢を見ていて、私ったら。寝ているんだわ。

どうしよう、今クリス兄さんが来たら会えない。

「どうしたの？」

サンタクロース、夢の中のクリス兄さんはこいつ笑ってマトリンの手を引きます。

「大丈夫だよ、ほら、おいで」

「あのね、今は夢の中なの？」

マトリンはふわりと抱き上げられて、気が付けばトナカイの背にクリス兄さんのサンタクロースと一緒に乗っています。

「そう思うのかい？」

穏やかに笑うクリス兄さんは金色の前髪をゆらりと夜風に揺らします。綺麗な緑の瞳。見つめられるとドキドキしちゃう、それは夢でも同じだわ。

マトリンは迷いました。

夢でも、クリス兄さんに会えるなら、つづく。

夢なら、何を言つても、何をしても大丈夫なのかもしれない。

それにこゝにしてサンタクロースになり切つて一入りでクリスマスの夜をトナカイでテートするのも素敵。本当じゃなくてもすゞく素敵な夢だわ！

マトリンは首を大きく振つて、後ろから支えてくれるクリス兄さんにそつと背中を預けます。温かい、とくとくした鼓動が聞こえるような気がします。

「ピピーーー！」

ちょうど、トナカイが一人を乗せて静かに地面に降り立つた時でした。

何処からか甲高い笛の音がしました。

「こひーー！」

背後から怒鳴る声。

見ると黒い人影がマトリンの家の前の通りを走つてきます。びりやら警笛のようです。

「いけない」

クリス兄さんはトナカイの手綱をぎゅと引きます。

トナカイはクンと小さく鳴いて走り出しました。

「なあに？どうして追いかけてくるの？」

「この頃は物騒だからね、泥棒と間違えられるんだ」

「大丈夫よ、ちゃんとサンタクロースだって分かれば許してくれるわ

けれどもトナカイは止まらずに走り続けます。

そのうち、サイレンが鳴り出しました。パトカーです。

それはだんだんと近づいてくるみたいで、マトリンは後ろを振り向

きましたが、背中をぴったりと支えてくれるクリス兄さんの大きな肩で見えません。

「掘まつたらダメなんだよ、マトリン。僕には時間がないんだ。プレゼントを配つてしまわなきゃいけないから」

「なんだか、盗賊とお姫様みたい」

くくく、と背中でクリス兄さんが笑つたのを感じました。

まだサイレンは追いかけてきます。

二人を乗せたトナカイは少し重たそうで、一生懸命走っています。遅い時間だからもう通りに人はほとんどいません。

「そここの怪しい奴、止まりなさい！」

ついに、警官の叫ぶスピーカーの声が聞こえのほどになりました。

クリスは、ますますトナカイを速く走らせます。蹄が雪を蹴り上げ、後ろのそりは右に左にとゆらゆらして。トナカイは少し疲れたように白い息をたくさん吐き出しています。

「頑張つて！」

マトリンがその頭をなでてあげると、大きな真っ黒な瞳がぐるりと動きます。長いまつげには霜が凍り付いてキラキラ光る。瞬きと同時にきらりんと星のような氷の欠片が風に流れていきました。

ビルやアパートの立ち並ぶ駅の近くまで来ると、ぐんと曲がって、狭い路地に入りました。ここなら車は追つてこられません。

「待てー！」

パトカーから降りた警官が、走ってきたようですが、そんな速さでは追いつきません。

「えへへ、やつたね！」

「マトリンがぎゅっとトナカイの首に抱きつきました。

そのときふわりとマトリンの被つていたフードが風に飛んで、金色の長い髪が広がります。ちょうど、パークーのサイレンの音や警官の声で人々の窓から人が顔を覗かせます。

「サンタクロースだ！」

頭上のどこかで小さな男の子の声がしました。

「困ったな」

クリスは狭い路地でトナカイを歩かせながら、後ろを振り向きます。「子供に見られるとサンタクロース失格なんだ。せっかく採用してもらつたのに」

「サンタクロースでいられなくなるの？」

「そうだよ」

「空を飛んだら？」

「もつと田立つてしまつだらう。」

「じゃあ公園で」

人のいないところと考えて言いかけて、マトリンはいい事を思いつきました。

「ね、お家に帰つましょ？温かいし、誰にも見つかれないわ。だって、クリスのおうちだもの、サンタクロースのクリスがいたつておかしくないでしょ？きつと甘美ぶわー！」

クリスはそこでトナカイを止めました。

街の路地裏。薄暗いビルの影に、小さな青白い街灯の下。でも、と猫らしい陰がどこかに隠れました。

ひらりと飛び降つると、マトリンに手を差し伸べます。

嫌な予感。

「私だけ置いて行つちやうんでしょう、一緒に行くんだから」トナカイの首にしがみつくマトリンの背を、クリスは優しくなでま

した。

「違うんだよ、マトリン。トナカイは田立つからね、ここからは歩いていいよ。また必要になつたらいつでも呼べるからね」

温かいトナカイの背中から見つめると、丁度同じ高さにあるクリス兄さんの瞳が優しく笑いました。

「ね、お家に帰りましょ」

こんな風に誰かに追いかけられるし隠れなきやならないし、高いところにも登らなきやいけないし。それに、パーティーにも出られないと。

「サンタクロースは大変だわ。危ないわ」

クリス兄さんはマトリンの髪をそっととなでました。

「さ、降りて」

仕方なくマトリンは引きずられるように硬い地面に降り立ちます。

「クリス兄さん、もう帰りましょうよ」

マトリンは拗ねたように足元を見つめます。クリス兄さんの足元にはたくさんの白い袋が置かれています。振り向けば、いつの間にかトナカイは姿を消していました。

「ね、マトリン。わかつてほしいんだ。僕はサンタクロースの仕事を大好きなんだよ。みんなが待つていてるだろう? マトリンのように、ベッドの中で今か今かと待つている子供たちが大勢いるんだ」

「なんだか、嫌だわ。クリス兄さんはマトリンだけのサンタクロースでいてほしいもの」

わがままだと分かっています。

それでも、これは夢なんだから。言いたいこと言つていいんだとマトリーンは思いました。

だから、クリスの真っ赤な服をしつかり抱きしめています。

「マトリン、いい子でないとそばにいられないんだ」

「え?」

ふわりと風が吹いて、その冷たさにマトロンは驚きました。
さつきまで寒さなんて感じなかつたの。

「待つて！」

目の前のクリス兄さんが薄くなつてしまつたよつなのです。
赤い色は向こうの雪が透けて見えています。

消えぢやう？私が悪い子だと消えぢやうの…？

まだまだ、この素敵な夢を見てみたい。

「やだー！」めんなさい！私もお手伝いするわーだから、ねー消えないで。まだ夢から覚めたくないの！」

「じゃあ、手伝ってくれるかい？僕はいつも優しいマトロンが好きなんだよ」

そのまま葉はマトロンを真つ赤なトマトみたいにしてしまつた。

どきどきして、ふわふわして。

何とかうなずいたマトロン、クリス兄さんも飛び切りの笑顔をくれました。

「さあ、行こう。夜明けまでに配りてしまわないとね

袋の一つをマトロンも拾い上げて、やつしてクリスと田代が合ひと笑いました。

「うそ、私もがんばるわ

それから一人は、アパートのらせん階段を上つて、途中から一階のベランダへと飛び移ります。

「怖かっただろ？よくがんばったね」

そう褒められるとマトロンはもつともつとがんばりたくなります。

子供部屋の窓だけは不思議と「」も開いていました。

まるで、そう。

みんながサンタクロースを待っているかのよう。

みんながマトリンを待つていてくれるみたいに。

赤い大きな靴下を下げた窓辺を抜けるたびに、マトリンも嬉しくなつてきました。幸せそうに眠る子供たちの顔を見ていたら、自然とマトリンも笑顔になりました。

きっと、朝起きてすゞく喜ぶんだろうな、そんなことを考えていました。

そうして、何軒も何軒も少し危ない田に合いながら、背の高いサンタクロースと小さな赤いマントのサンタクロースはプレゼントを配つてまわりました。

小さな街だと思っていたのに、こんなにたくさんの人人がいるのね、とマトリンは感心していました。そして、クリス兄さんがこのお仕事をしたいといつていた理由が分かつた気がしました。

駅の裏手の小さな借家の赤ちゃんと、真っ赤な小箱を置いて外に出るど。

クリス兄さんがぐんと伸びをしました。

「ごちやごちやした通りも、今は真っ白に塗りたぐられて、絵本の中のようです。こちらを見て笑うクリス兄さんが言いました。

「楽しかった？」

マトリンは大きく頷きました。

「来年もサンタクロースと一緒にしたいわ、私、クリス兄さんと一緒に仕事するの」

ふと、淋しそうにクリスは微笑みました。

「さつき、ほら。見られてしまつただろ？ 小さな男の子に。だからね、僕も今年で最後だ。サンタクロースにはもう、なれない」

「え…？」

「でも最後だから、ちゃんと全部プレゼントを渡したかつたんだ。あんなふうに誰かに見つかってしまつたりするから、サンタクロースも仕事が出来なくなつて全員にプレゼントを届けられないことがあるんだ」

クリスは歩きながら話してくれました。

「ほら、普通はおじいさんだろ？ けれど、今では建物は何階もあつて登らなきゃいけなかつたり、警察に追いかけられたりするからね。それに、子供が眠る時間が遅くなつていてるから、配れる時間が短くなつているんだ。大変になつてしまつたから、僕みたいな若いサンタクロースが増えているんだよ」

「ふうん」

なんだか、夢のくせにずいぶん現実的だわ。マトリンはそれでもクリス兄さんの話を感心して聞いていました。

「毎年大勢のサンタクロースが採用されて、でも、僕みたいに子供に見つかってすぐに続けられなくなつてしまつ。解雇されるとね、サンタクロースだつた時の思い出は消されてしまうんだ」

そこで、マトリンは気が付きました。

「ねえ！ ねえ、クリス兄さん？ もしかして、最初にクリス兄さんのサンタクロースを見つけてしまつたのは、私？」

それには何も応えずに、クリスは「ゴニゴ笑つていました。

私が眠らないで起きていたから。

だからあの時からもう、クリス兄さんはサンタクロースでいられなくなつてしまつたの？

サンタクロースのクリス兄さんとても素敵でした。楽しそうでした。

なのに、私のせいで続けられない。

悲しくなって、マトリンは何も言ひ出せません。

もう、取り返しがつかないのです。

なのに、クリス兄さんはとても優しく笑ってくれます。

「ああ、そんな顔してないで。後一つだよ、マトリン。お待たせしました」

「え？」

「君へのプレゼント、まだだったね」

そうしてクリス兄さんはマトリンの背中を押して、一緒に歩き始めました。

雪の中を、歩き、歩きと小さな音を軋ませて。

そうして、一人がたゞり着いたのは、狭い路地の先にある小さな一軒の家でした。

窓辺には小さなツリーとメリークリスマスの文字が吊られています。そう、まだその部屋には灯りが点つっていました。

「まひ、いいだよ

「誰の家？」

「会ったかったらいいっし。」

そつと窓からぞこしてみました。

温かそうな小さなお部屋。リビングのようです。窓のすぐ近くには小さな、本当に小さなベッドが置いてあります。

フワフワした白い毛布の中には誰もいません。

ふらりと影が横切りました。

パジャマ姿の綺麗な女の人（ママ）がまだ小さな赤ん坊を抱っこしていました。泣いている様で、高く上げたり、背中をとんとんしたり。その赤ちゃんを覗き込んであやしている、男の人。大きな背中。見たことがあります。

あれは。

「パパ！」

マトリンは思わず声が出てしまって、すぐに口を手で塞ぎました。

すくなくして、女の人と顔を見合わせて笑っている。

あゅん、と。

マトリンは唇をかみました。

「私は、会いたかったのに。クリスマスに会いたかったのに」
うつむいたマトリン肩をふわりとクリス兄さんが包みます。

「パパは、私には会いたくなかったの？」

「そんなことないと思うよ。ただね、たくさんの家を見てきただろ
う？いろんな家があつて、いろんな家族がいて。君のパパもここで
こうして新しい家族を作ってる」

「クリス兄さん、ひどいわ。これ、こんなの。こんなプレゼントな
んかいらない！」

マトリンは悲しくなつて、叫びました。

「マトリンはいい子だった？」

「え？」

背後のクリスを見上げると、やつぱりクリスは透明になりかかっていました。悲しそうに笑っています。

「マトリンは、この一年、いい子だったかな？」

クリスの瞳はじっと、マトリンを見つめました。それから、目をそらします。

「つづん。違づわ

マトリンは足元の雪を、ブーツのつま先でシンシンとつきました。

「私、悪い子だった。ママのこと、いつも苛めてた」

視線を落としてうつむくマトリンに、クリスは小さく頷いていました。

「パパに会えなくてママも淋しいのに、それでもママのせこだつて、いつもママを困らせていたわ」

「ママに会いたい？」

マトリンの足元には小さな涙の粒が落ちて、赤茶色のブーツにすら積もった粉雪を溶かして流れていきました。

「じゃあ、今度こそ、最後のプレゼントだね」

静かな夜明け。明るくなりかかる透明な空を、トナカイが横切ります。

小さな星が朝の風に消えそうになりますながら、それでも光っています。マトリンはクリスに支えられながらトナカイに乗ってきました。横向きに座つて、ぎゅっと背後のクリス兄さんにしがみつきます。クリス兄さんの手がしつかり腰に回っているので怖くありません。

「ねえ、空を飛んだら見つかっちゃうって

はたはたと風に舞うマントを押さえながら、マトリンは一生懸命クリス兄さんの首に抱きつきました。少し、まだ少し涙が出る顔を見

られたくないのです。

「 もういいんだよ」

これが最後の仕事だから？

マトリーンは切なくなつて、また少し涙が出ました。

そうして、二人を乗せたトナカイはマトリーンの家の前に降り立ちました。

とたんに朝日が金色に照らし、巻き上がつた雪煙が風にふわりと立ち昇ると、トナカイとクリス兄さんを包みました。

「あ」

何もかも。

トナカイも、そしてクリス兄さんのサンタクロースも消えていました。

マトリーンは一人雪の中に座り込んでいました。

「 マトリーン？」

一階のマトリーンのお部屋の窓こ、元窓のママの顔が見えました。

それはすぐに消えて。

マトリーンが立ち上がりて膝の雪を払う時には、玄関の扉が開きました。

た。

「 マトリーンーもひーべー行つて行つていたのー?心配したのよ

ママが駆け寄つて抱きしめてくれました。

赤いマントがなくなつたマトリーンは冷たい風に震えていたけれど、ママの胸は温かくて、クリスのひげと同じ少し甘い香りがしました。

「ママ、『めんね

マトリンは心からそう思いました。

心配したトーマスが駆け出してきて、キッチンでは伯父さんが温かいミルクを用意してくれました。泊まって行った従姉妹たちも叔母さんたちもお祖母ちゃんも、みんな起きていて、マトリンを囲んでテーブルに着きました。

そうして、マトリンが話すサンタクロースのお話を、じつと聞いてくれました。

「素敵な夢を見たのね？」

ママが笑います。

こうなるとマトリンには夢だったのかどうか分かりませんが、説明しても夢にしかならないからそうしておきました。

夢だったんだるうって？

いいえ、きっと違います。

本当にクリス兄さんのサンタクロースはいたのです。

だって玄関には、マトリンがはいていた新しいブーツがキッチンと並んで置かれています。

「ね、クリスが最後にプレゼントしてくれたのはなんだったの？」

トーマスが聞きました。

「それは、秘密」

マトリンはパパに会つたことは話さないでおきました。

それは、クリス兄さんがくれたプレゼントを大切にしたいと思つたから。

みんなの笑顔を大切にしたいから。

それは、去年のクリスマスの出来事でした。

少しだけ大人になったマトリーンは、今、ママと一緒にクッキーを形作りながら、クリス兄さんの帰りを待っています。

あれから一日後に帰ってきたクリス兄さんは、マトリーンの話を聞いて不思議な夢を見たんだねと笑っていました。サンタクロースのバイトの話をしても、ちつともわかつていよいようでしたし、あの時言っていたように、お仕事を辞めたから忘れてしまったのかかもしれません。

けれど。

マトリーンは覚えていります。

だから、クリスが帰つてきたらお部屋に入れてもうつて、真っ赤な衣装があるかどうか。

確かめてみようと思いつのです。

もちろん。大好きなクリス兄さんとおしゃべりするのが一番の目的ですが。

了

(後書き)

この作品は2007年のクリスマスのために書き下ろした短編童話です。
楽しんでいただけたら嬉しいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9296e/>

最後のプレゼント

2010年10月28日02時53分発行